

《第一話》

天狗の鹿笛

むかし。

大川原の里、葉芹川のほとりに藤兵衛という若者が住んでいました。

猟のすきな藤兵衛はひまさえあればただ独り日隠山の奥ふかくわけ入って、猪や、鹿や、鳥・兎などを数多く射止めては自慢気に獲物を肩にして帰りましたので、だれいうともなく名人藤兵衛とか、豪胆者の藤兵衛とか呼ぶようになりました。

その日も藤兵衛はただ独り野上川から小塚川の流れに沿って、日隠山の山ひだ深くわけ入りしました。霜月もなかばすぎでしたので、紅葉した木々が美しく陽にかがやいていました。藤兵衛の腰には、もう雉が二羽、山鳥が二羽ほどぶらさがっていました。

ふとみると、せまい山みちのまんなかに、大きな碗に山盛りにたきたての飯がもってありほかほかと白いけむりが立ち昇っています。

豪胆な藤兵衛は立ちどまって不思議そうにながめていましたが、やがて道ばたの大石に腰をおろして、碗の飯をペロリとたいらげてしまいました。